

# 市史編さんだより



(42)

中世武士の館と河川交通  
金子氏の屋敷と入間川

村山党の中心的な武士  
団として金子氏がおり、  
源平の争乱以後活躍して  
いたことはよく知られて  
いる。その金子氏の子孫  
家重が、南北朝の内乱も  
収束を迎えつつあった永  
和五年(一三七九)に孫  
「いぬやう」に金子郷の  
屋敷地を譲った史料が残  
されている(東村山市

史の資料編 古代・中  
世、中世、写文書)こ  
れを手がかりに、中世武  
士の館の様相を復元して  
みよう。

かな書きの文書なので  
意味のとれない部分もあ  
るが、その領域は「ひん  
かしのさわのながれ」  
(東の沢の流れ)、「さわ  
たのみな」のほりおにじ  
八かきの「(五)沢田の南の  
堀々を西は隈り」などで  
あり、また「さわのとお

りを「沢の通りを」など  
とも記されていることか  
ら、この屋敷地が、自然  
の沢や人工の堀によつて  
囲まれたところに立地し  
ていたことがわかる。そ  
してそれに続いて、「し  
やちう二年のいるまか  
わのなかれおちきやうす  
へし」(正中二年の入間  
川の流れを知行すべし)  
と記されていることが注  
目される。「正中二年  
(一三三五) 段階の流れ  
を知行(領有)せよ」と  
いっているのは、入間川  
の流路の変更によるもの  
か、鎌倉幕府(一三三三  
年滅亡)によつて認定さ  
れ、領有権を再度確認し  
たものかは不明である  
が、屋敷地のなかに川  
(入間川)の流域の支配  
権が含まれていたこと  
は、当該期の武士の館の  
構造を知る上で注目され  
よう。

というのは、武蔵国の  
武士団として有名な秩父  
氏の嫡流河越氏の館も同  
じく入間川に面していた  
ことが知られるからであ  
る。種長明編著の鎌倉時  
代前期の仏教説話集『発  
心集』の巻四の四六は  
「武州入間河沈水の事」  
と題し、その冒頭に次の  
ように記されている。

武蔵国入間河のほとり  
に、大きな堤を築き、  
水を防ぎ、そのうちに  
田畠を作りつつ、在家多  
く群り居たる所ありけ  
り。

これが河越氏の館の描  
写なのだが、この館が入  
間川に面して建造されて  
おり、洪水から屋敷地を  
守るために「大きな  
堤」が築造されていたこ  
とがわかる。金子氏の屋  
敷とほぼ同様な立地に  
あったことは明白である  
う。

単に用水の水源地の確保  
を意図していただけでは  
ないであろう。屋敷の面  
した川辺には「舟入り」  
などが設置され、河川を  
交通路として利用すると  
ともに、その交通路とし  
ての機能を掌握すること  
も目的とされていたのでは  
ないだろうか。

以上のように、この  
「金子家重屋敷」の屋敷  
の領域記載は、関東の中  
世武士の館の立地と機能  
を考える上で重要な情報  
を提供してくれる史料で  
あるといつてもできま  
う。

(古代・中世担当 木村茂光)